

病気の原因。病魔を乗り越える信心

令和6年4月1日 御経日

1. 仏法で説く病の原因

① 四大不順の故に病む

人体を構成する、地水火風の四大の不調和によって起こる病気のことです。

- 1) 地大の不調和…筋肉、神経、骨格、毛髪、血管、皮膚、歯科等の病気。
- 2) 水大の不調和…血液、ホルモン、酵素等の分泌物、発汗、消化器の病気。
- 3) 火大の不調和…発熱、炎暑等による病気。
- 4) 風大の不調和…呼吸器、循環器の病気。

大聖人様はこうした四大の不調和による病気を、

「一には身の病、所謂地大百一、水大百一、火大百一、風大百一、已上四百四病なり」

(治病大小権実違目、1235参)

② 飲食不節の故に病む

食生活、飲食物の節度を守らない故に起こる病気のことです。

胃腸病、肝臓病、栄養不良。具体的には水、酒、コーヒー、薬物の飲み過ぎ、食べ過ぎ。

反対にカロリー不足、栄養不良、偏食。その他にも煙草や麻薬等によって起こる場合もあります。

③ 坐禅調わざる故に病む

これは心の怠慢による病気のことです。生活の不規則、姿勢の不良、運動不足、睡眠不足、過労、精神の不安定によって起こります。また今日最も注意すべきこととして、突発的な交通事故や怪我等も、心のゆるみ、スキに起こるものと言えます。

以上の3つのことが原因で起こる病気は、どちらかと言えば軽病に属し、自分の注意、養生だけでも防ぐことができます。医学的にも治療法も確立されており、適切な治療、薬、良き看護を得れば必ず治る病気だと言えます。

こうした病気と闘うには、病人自身の意志や気力もさることながら、良き看護も非常に大切です。

総本山第26世日寛上人は看病人の五徳として次のように仰せになっています。

- 1) 病人の食べていいもの、食べてはいけないものを良く知ること。
- 2) 大小の汚物等を悪まず、感情をおもてに表さないこと。
- 3) 慈心をもって進んで看病し、お金や衣食の報酬を目的としないこと。
- 4) 正しい湯薬の知識を持つこと。
- 5) 病人に法を説き、勇気づけること。

④ 鬼便りを得る故に病む

これは伝染性の病原菌が繁殖して起こす病気のことです。ウィルス性のインフルエンザ、伝染病、エイズ、更には近年新たにアジアで流行した新型肺炎（重症急性呼吸器症候群＝SARS）、世界中で流行している、コロナ禍も、この中に入ります。

この病気は、抗生物質等の医薬の力はもとよりですが、何よりも生命の力、本人の抵抗力を高めることが必要です。日寛上人は、信力を強くして冥加を仰ぐべきであると教えられています。

⑤ 魔の所為による故に病む

この病気は、信心している人が、発病することによって信心に疑いを持ち、結局信心を捨てること、唱題の意欲を失うことを言います。医学的には精神病、神経症等の心の病がこれです。

又、魔の所為ということから言うと、飽くことのない愚かな欲望や怒りのために、引き起こす戦争によって多くの人命を失うのも、魔の所為です。今日のロシアとウクライナ戦争、イスラエルとパレスチナの戦争も魔の所為と言えます。

大聖人様は治病大小権実違目に、

「二には心の病、所謂三毒乃至八万四千の病なり。此の病は二天・三仙・六師等も治し

難し。何に況んや神農・黄帝等の方薬及ぶべしや」（1235巻）

と医学の力では、この病気を根底より治すことはできないとされています。

⑥ 過去の宿業の故に病む（業病）

これは過去世の宿業による病気で、人智の及ばない宿命的な病です。例えば遺伝的な病気、先天性異常、虚弱体質等のことです。

以上の6つが仏法で説く病の起こる原因です。

しかし、病氣は幾多の原因が重なりあって起こるのであり、譬えば肺を病むことによって心を病み、更には身体の全てが病んでくるのです。従って一つの病に対応する処置だけすればいいのではなく、何と言っても正しい信仰によって、ほとぼしる旺盛な生命力を涌现し、良医の治療のもとに正しい規則的な食生活をしていく姿勢が大事なことです。

2. 病気で苦しんでいる人へ

法華經には病の人のみならず、すべての人を救済する最良の道として、壽量品に、
「是の好き良薬を、今留めて此に在く。汝取って服すべし、差えじと憂うること勿れ」
(開結、504頁)

とあります。薬王菩薩本事品にも、

「此の經は則ち為れ閻浮提の人の病の良薬なり。若し人病有らんに、是の經を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならん」(開結、606頁)

と説かれています。これを天台大師は摩訶止觀に、

「法華能く治す復稱して妙と為す」

と言ひ、妙薬大師は、

「治し難きを能く治す所以に妙と稱す」

と妙法蓮華經の力用(功德)を説かれています。

妙法蓮華經の大法を護持し、御本尊を受持信仰した功德によって、病を克服した人々、医者 of 想像を絶する奇跡的な快復をし、嬉々として働いている人は枚挙にいとまがありません。

大聖人様は法華經題目抄に、

「妙とは蘇生の義なり。蘇生と申すはよみがへる義なり」(3.60頁)

と御指南されています。

この「病即消滅」とは、どういうことかと言うと、日寛上人の御指南によれば、

- ① 仏様によって良医に巡り会うことが出来る。
- ② 薬が良く病に相応し、治療が成功する。つまり一の治療が二や三の働きを持つ。
- ③ 長病すべきを、速やかに癒える結果を得る。

と教えられています。つまり御本尊を信仰する者には、一つの治療が、よりベターに、よりベストに働く作用を持つと仰せなのであります。

また「不老」とは、妙法を信仰する者は、耄碌せず、たとえ歳はとつても常に若々しく瑞々しい生命力を發揮し、人生を遊樂する境涯に至るということでもあります。

そして「不死」とは、妙法を信仰する者は、大きな福德を積んでいる故に、いたずらに「横死せず」という事で、具体的な例を挙げると、

- ① 何の罪もなくして命をおとす。
- ② 飢渴、寒暑等にて不幸な死を招く。
- ③ 寿命が尽きないのに、手術の失敗や投薬の誤り等、医療ミスにて命をおとす。
- ④ せっかくの治療、薬方がしっくりいかない、不順である。
- ⑤ 誰一人見守る人もなく、淋しく死ぬ。

妙法を受持信仰する人には、悲しい不幸な悪縁によって死ぬことが絶対はないとのことです。皆様はこれほどまでに守られていることを知らねばなりません。

よって私達は、強盛な大信力を起こして、大御本尊の御加護のあることを確信すべきです。病気で苦しい、痛い、悲しいと嘆いていても、何の解決もありません。むしろ苦しいからこそ、より道心を起こして信心に励まなければならないのです。

開目抄に、

「我並びに我が弟子、諸難ありとも疑ふ心なくば、自然に仏界にいたるべし。天の加護なきことを疑はざれ。現在の安穩ならざる事をなげかざれ。我が弟子に朝夕教べしかども、疑ひををこして皆すてけん。つたなき者のならひは、約束せし事をまことの時はわするゝなるべし」(574鈔)

との御言葉を肝に銘じ、苦しい、辛い今こそが最も大事な時であります。信力を奮い起こし、唱題していくならば、信力の故に冥加があり、ここに医学の力が有効適切に相まって効力を発揮するのです。

しかし、いくら妙法の力が広大であると言っても、一服の薬を飲めば、たちまち一転して快癒するといった奇跡や神通を頼むのは、それはまた邪道です。

大聖人様は四條金吾殿御返事に、

「真実一切衆生色心の留難を止むる秘術は唯南無妙法蓮華経なり」(1194鈔)

と仰せられ、日寛上人は、

「諸薬の中には南無妙法蓮華経第一の良薬也」(研教10-628鈔)

とされています。妙法に勝る良薬なし、この信念に徹することこそ大切です。

3. 信心しているのに病気になった、と信仰に疑いを持つ人へ

信心を一生懸命しているのに病気になった、と信心に疑いを抱く人がいます。

実は、仏法ではこうした心身の病によって信心の動揺をきたすことを「病魔」と言うの

です。病氣そのものを指して病魔とは言いません。

病氣を通じて自分の五陰＝色（身体）、受（感覺）、想（思考）、行（行動）、識（意識）に起こる正法への不信、謗法を名づけて「病魔」あるいは「陰魔」と言い、「信心しているのに、一生懸命やっているのに、何故こんな病氣になったんだろう」と思い悩む人は、全てこの陰魔に直面しているのです。

今世に正しい信仰に帰することができたとは言っても、その人その人の顔形も違えば、智慧、才能、貧富の差があるように、病苦にさいなまれる事も、一人一人の過去の宿業の善悪、大小、良否、その果報によるのです。

大聖人様はこのことを、佐渡御書に、

「何に況んや過去の謗法の心中にそみけんをや。経文を見候へば、烏の黒きも鷺の白きも先業のつよくそみけるなるべし」（581頁）

と、一切は過去の宿善の有無によって招くものである事を教えられています。

しかし、だからと言って、いたずらに嘆き悲しみ、諦める必要はありません。

法華経・涌出品に、

「如来は安樂にして少病少惱なり」（開結478頁）

とあり、御義口伝には、

「上仏界より下地獄の罪人迄撰すべきなり。病とは三毒の煩惱なり」（1787頁）

と御教示のとおり、病は大聖人様や釋尊等の仏菩薩にも、偉人にもあるものであり、決して皆様だけが不運に見まわられているわけではありません。

しかも正法の行者が今世において悩むことは、涅槃経に、

「呵嘖、罵詈、鞭杖、飢餓、困苦、是の如き等の現世に輕報を受けて地獄に墮ちず」

とあり、般泥洹経には、

「余の種々の人間の苦報に遭う。現世に軽く受くるは是れ護法の功德力に由る故なり」

と説かれているように、過去の一切の罪障と未来の大苦を、變毒為藥せしめるために、転重軽受せしめるために、今、少病少惱していることを知るべきです。

正法を行ずることによって、過去の罪障と、未来の無間の苦しみの不幸を、今ここで断ち切るか、それとも謗法不信を重ねて、更に雪ダルマ式に重苦への因を累積していくか。今はまさにその決断の時と言うべきであります。

転重軽受については、

「涅槃経に転重軽受と申す法門あり。先業の重き今生につきずして、未来に地獄の苦を受くべきが、今生にかゝる重苦に値ひ候へば、地獄の苦しみぱっと消へて」

（転重軽受法門、480頁）

「過去に人を障へつる罪^{さき}によって未来に大地獄^おに墮つべきが、今生^{こんじょう}に正法を行ずる功德強盛なれば、未来の大苦をまねきこして少苦に値ふなり」(兄弟抄、981号)と御指南されています。

また、この信心をする人は、世間の人々よりも病気になる比率は遙かに低いのも事実です。大聖人様は治病大小権実違目に、

「いかにとして候やらむ。彼等よりも少なく病み、少なく死に候は不思議にをぼへ候」(1237号)

と仰せになっています。

病気を嘆いていても治るものではありません。信心しているのに何故病気がなったのか、何故治らないのか、と言って自らの罪障と信仰姿勢を棚に上げて、正法を疑い、謗法を重ねる程愚かなことはありません。

一大信力を起こし、御本尊への唱題を続け、一心欲見仏不自惜身命と、広布のために祈り、広布のために働き、広布のためにお役に立てる健康な身体にしてくださいと心から願うことが大事です。

「苦しい時こそ」

- 苦しい時こそ 信心に励める幸せを知るべき
- 苦しい時こそ 御本尊様の御加護を確信すべき
- 苦しい時こそ その苦しみの原因を見つめるべき
- 苦しい時こそ 強い心を持つべき
- 苦しい時こそ 罪障消滅できる喜びを知るべき
- 苦しい時こそ 御本尊様から与えられた試練と知るべき
- 苦しい時こそ その先にある幸福に思いをいたすべき

以上